

# 会員からのメッセージ

## 後期高齢者でいただいた学位記



猪熊 兼勝

(2024 博 文学研究科)

子供の頃「博士」と云えば、手塚治虫の鉄腕アトム父親役のお茶水博士のことであった。手塚は奈良県立医大で博士号をとったが、間もなく漫画家へ転身した頃だった。彼の博士論文は医大に保管されている。私の父は法学部の教授であったが、友人が「君の家にもフレスコや試験管があるのか」と聞いてきて、ガッカリした友人の姿を覚えている。今、私はコーヒー用のフレスコを前に、お茶の水博士に一步近づいたのかもしれない。

私の学生時代「博士」と云えば、大先生が晩年にいただかれ、祝賀会が催された。博士の書かれた論文は「神のことば」でもあった。引用する時「何々先生」ではなく「何々博士」と特記したものである。

昭和49年、大学院設置基準で大学院に博士課程が制定された。だが、旧体制然として、新制博士も至難の道だった。民主化が進み徐々に課程博士が誕生し始め、優秀な若い博士が誕生し始めた。旧制度も併存したが、私はこの狭間に遭遇し、次第に取り残されていった。それを口実に博士とは無縁の存在であったが、80歳も半ばの頃、考古学の米田文孝先生から論文提出のお話を頂いた。聞くと25万字以上の副論文が必要との事、やはり無縁の存在となった。それでも励ましのお言葉を頂き、記憶をたどり、拙文を集めると40万字あった。全部で80万字程になりそうだ。意外と雑文を書いていたものだ。主としたテーマは「飛鳥時代の古墳」。その始まりは、学生時代に出会った大阪府柏原市安福寺の漆板を聖徳太子の柩断片とするものであった。自信ある結論だったが、研究者には無視された。60年後の平成31年、これを証明できる確定的な文書が現れた。奇跡だった。

昭和47年には高松塚が発掘され、調査に関った関西大学考古学研究室は、世間の注目するところとなった。高松塚は封鎖的な考古学研究の世界を学際的なオープンな学問へと解放させた。これに関西大学が関わった事は大きな誇りである。

その成果の一つとして、飛鳥時代の古墳は被葬者論がつきものである。そんなことを思い浮かべながら、やっと論文が完成した。読み返すと、死者を葬る薄葬の話が多く、テレビで家族葬、樹木葬のコマーシャルと併存する。歴史的に見ると、仏教が火葬を推進し、散骨をリードしてきた。生きた証を消滅することが新羅文武王や元明天皇の願いでもあった。時間は刻々と現代を過去とし、無限に歴史学の対象となる。やがて考古学から「古墳の被葬者論」はなくなるだろう。古代仏教の究極は、現代の先端葬法とクロスする。

久しぶりに母校を訪れると、広大な広場は、コンクリートジャングルに様変わりしていた。厳粛な学位授与式は、始めて見る新しい関西大学の姿であった。知らないことだらけで、頭が混乱する。

## やらされる学びからやる学びへ



村田 宗一郎

(2024 修 社会安全研究科)

人生1度きりだから挑戦したい。これは学部3年生の夏休みに私が考えていたことです。この時期はコロナ禍であったため、従来の大学生生活とは程遠い生活を送っていました。一人で過ごす時間が必然的に多くなり、その中で自分の将来を真剣に考えるようになりました。そして、学問を突き詰めたいと思い、本学大学院への進学を決意しました。

大学院では、学部生時の研究と同様に地震防災に関係したテーマを研究しました。私の研究では、